

## パラグラフの組み立て方・並べ方

### 1. パラグラフとは

分かりやすい答案をまとめる7つの基本原則（第7回で解説）と、答案の構造と要素（第8回講座で解説）で説明した、「パラグラフ」について、詳しく解説します。

「パラグラフ」は、ひとつのトピック（話題）を説明するために論理的に関連付けた、複数の文の集まり（単位）を指します。パラグラフは原則として、そのトピックを表明したひとつの要約文（主題文あるいは、トピックセンテンスという）と、複数の補足情報の文で構成します。補足情報の文とはそのトピックをより詳しく説明した文のことです。

パラグラフは日本語文の「段落」と似ていて、「意味段落」と和訳されることもあります。しかし、元々の「段落」は長い文章を、内容などからいくつかに分けた区切りとしており、パラグラフよりも緩やかな定義となっていて厳密には異なる概念です。パラグラフには、1つのトピックを述べるという決まりがあります。段落にはそのような明確な決まりはありません。

上の文の集まりはパラグラフ構造にしています。パラグラフ冒頭の太字で記述した文がパラグラフの**主題文（トピックセンテンス）**で、パラグラフの定義を要約しています。トピックセンテンスの後に続いている文が、それを補足・説明する文です。

### 2. 小論文ではパラグラフの組立と、並べ方が特に重要

パラグラフという文章の単位（まとまり）で構成すると、論理的に分かりやすく理解が早まるので、合格できる答案にまとめやすくなります。パラグラフをいかに論理的に組み立て、それぞれの文章をどのように構成するかによっては、論文の各項目の表題（タイトル）に工夫することと併せて、わかりやすさと答案全体の収まり方が決まるのです。

パラグラフの組立方と書き出しに当たる主題文で全体構造を表現することは、第一に、受験者がこの出題の意図を理解できていることを、採点者に早く納得させることができます。受験者が出題の意図の全体を正確に理解しており、その理解に基づいて論理的に思考し、表現していることを読み手、つまり採点者にすぐにわかってもらえるような書き方が重要です。

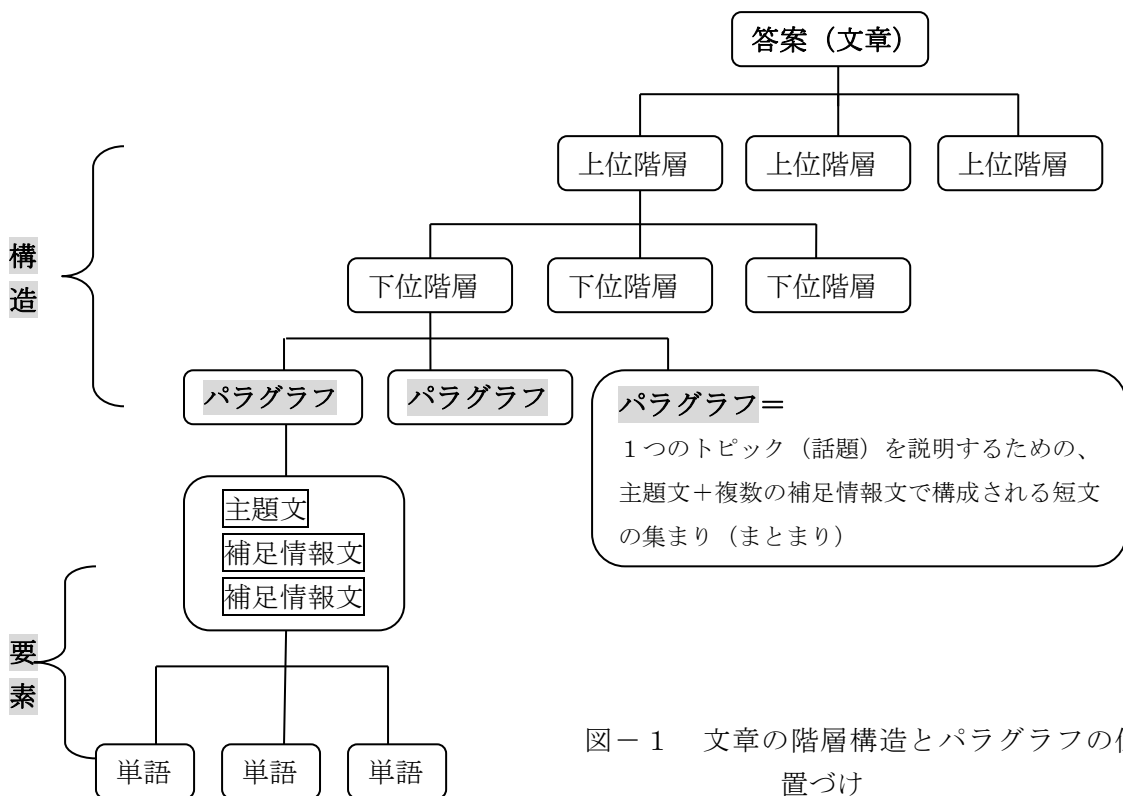
第二に、パラグラフのまとまりで書くことは、各項目の記述量が目分量で確認できるので、文字数、記述時間に制限がある記述式試験の答案などの小論文では答案の収まりとバランスも良くなります。

重要な結論や総論を最初に取り書き、その理由や詳細な説明を後に書くことで、仮に記述スペースが不足する見込みとなっても、後の説明を短く、あるいは省いても全体の要旨は先に伝えることができます。これとは逆に理由や詳細な説明から入ると、最後の結論が収まらなくなり、重要な部分が尻切れになる事態もあり得ます。これは答案として最も避けなければなりません。

このように、記述式試験の答案などの小論文では、それぞれのパラグラフの組立方と並べ方、文章の記述順序つまり小構造の出来もわかりやすさの大きなポイントです。

各パラグラフの組み立てとして、まず冒頭に主題文（ここではトピックセンテンスとも呼ぶ）にあたるものを書き出します。筆記試験ではパラグラフの中まで答案用紙に書いてしまってから並べ替えるのは困難ですから、トピックセンテンスを思い浮かべて、あるいはメモして順序を決めます。そして円滑に論が進むことを確認したら、各パラグラフのトピックセンテンス以下を一つのトピック（論題）で肉付けしてまとめていくのです。

答案を含めた論文は次のように階層で構成し、下位の階層はパラグラフで構成します。さらにパラグラフは1つのトピックを説明した意味のある短文の集まり（まとまり）によって表現します。モノに例えると、階層・パラグラフは構造、単語・単文は要素・部材ということになります。



図－1 文章の階層構造とパラグラフの位置づけ

### 3. 分かりやすい答案にするためのパラグラフの組立方、並べ方の7つの原則

パラグラフを効果的に展開して、分かりやすい答案にするためのパラグラフの組み立て方、並べ方の7つの原則を以下に説明します。

- 3-1 最初のパラグラフは総論から始める
- 3-2 1つのパラグラフには1つのトピックだけを述べる
- 3-3 パラグラフの中の最初の文はパラグラフ全体の要約文から始める
- 3-4 次に続く文章で補足して詳しく説明する
- 3-5 既知の情報から未知の情報への流れで説明していく
- 3-6 パラグラフを接続し組み合わせて展開していく
- 3-7 パラグラフの内容、表現を揃える

### 3-1 最初のパラグラフは総論から始める

文章は、結果や結論あるいは概論などの重要な情報（＝総論）をまとめたパラグラフから始めます。この総論は、文章の始めだけでなく文章に階層があればこの階層ごとに設けます。文章を総論のパラグラフで始めると、主に次の7つの効果が期待できます。

- |         |  |
|---------|--|
| 読み手にとって | <ul style="list-style-type: none"><li>・その先に書いてある内容（詳細）を予め予想しやすい</li><li>・根拠・理由などの正当性を、読みながら確認しやすい</li><li>・詳細に読み進めるべきかを素早く判断できる</li></ul>  |
| 書き手にとって | <ul style="list-style-type: none"><li>・大事な情報（結論、主張など）を強調できる</li><li>・書き落とし（モレ）や、重複（ダブリ）を防ぐことができる</li><li>・以後のパラグラフと文章を、論理的に展開できる</li><li>・以後のパラグラフと文章の主旨を変えずに長短を調節しやすい</li></ul> |

総論のパラグラフの内容は、以後の結論と各論に合わせなければならないことはいうまでもありません。また総論の文は具体的かつ簡潔に書くことが大事です。見出し（タイトル）を単に繰り返すような内容では、何も述べていないのと同じ（スペースがムダ）です。

### 3-2 1つのパラグラフには1つのトピックだけを述べる

1つのパラグラフでは、同じ1つのトピックだけについて述べ、他のトピックは別のパラグラフにします。1つのパラグラフでは原則として4～8以内の文を、1つのレイアウトの固まりとして用います。パラグラフの途中では原則として改行しません。最初を総論のパラグラフから始め、1つのパラグラフでは、同じ1つのトピックだけについて述べることにより、書き手は論理構成をまとめてから文章を書き始めることになるので、より論理的な文章展開ができます。

### 3-3 パラグラフの中の最初の文はパラグラフ全体の要約文（主題文）から始める

最初の文は、そのパラグラフ全体を要約する内容の文（主題文：トピックセンテンス）にするので、慎重に書きます。書き方として、前のパラグラフの要約文と繋がり、総論と対応するようにします。主題文はできればキーワードを文頭に置いて書くと、よりわかりやすくなります。それぞれのパラグラフの要約文だけを集めても、大事な情報が強調され、全体の概要・論理が理解できるように記述します。

### 3-4 次に続く文章で補足して詳しく説明する

主題文の次に続く文で、主題文を詳しく具体的に補足、説明します。この補足文の情報の説明で文章の説得性や論理性が示されます。補足情報は主題文について、基本的には次の3つのファクターのいずれか、あるいは組み合わせで補足し記述します。

- ・詳しく説明すればどういう意味か . . . . . (What)
- ・なぜ、そうなのか、そういえるのか . . . . . (Why)
- ・どれだけ重要か、具体的にどのようにするのか . . . . . (How)

### 3-5 既出の情報から未出の情報へつないで説明していく

パラグラフ内の各文は、文頭に既に記したキーワード（既出すなわち既知の情報）を使って書き初め、文末には未だ使っていないキーワード（未出すなわち未知の情報）で説明します。このように読み手にとって既知から未知へ流れをつくって文章を展開していくと、

読み進むに従って理解しやすい流れができます。途中で未知の情報が説明なしに入ってくると、読み手は初めて出てくるキーワード（情報）に対しどこか前に書いてあったことを読み落としてないか、もう一度戻って読み返そうとします。これが混乱の元であり、わかりにくさの原因になりがちです。

例文：

ガソリンエンジンの主流であるレシプロ方式のエンジンについて説明する。

レシプロエンジンは、シリンダー、ピストン、コンロッド、クランクシャフトの4つの主要部分から構成されている。まずシリンダー内に、気化されたガソリンと空気が適量に混ぜられた燃焼ガスがピストンの往復運動によって取り込まれ、ピストンによって圧縮される。プラグによる火花でこのガスに点火し爆発させることでピストンが押され、ピストンの運動をコンロッドに伝え、クランクシャフトを回転させる。このピストンの往復運動を回転運動へ変換することがレシプロエンジンの作動原理である。

### 3-6 パラグラフを接続し組み合わせて展開していく

パラグラフを、次のブロック図のように、縦方向につなげるか横方向に並べるかをしながら組み合わせて展開していきます。

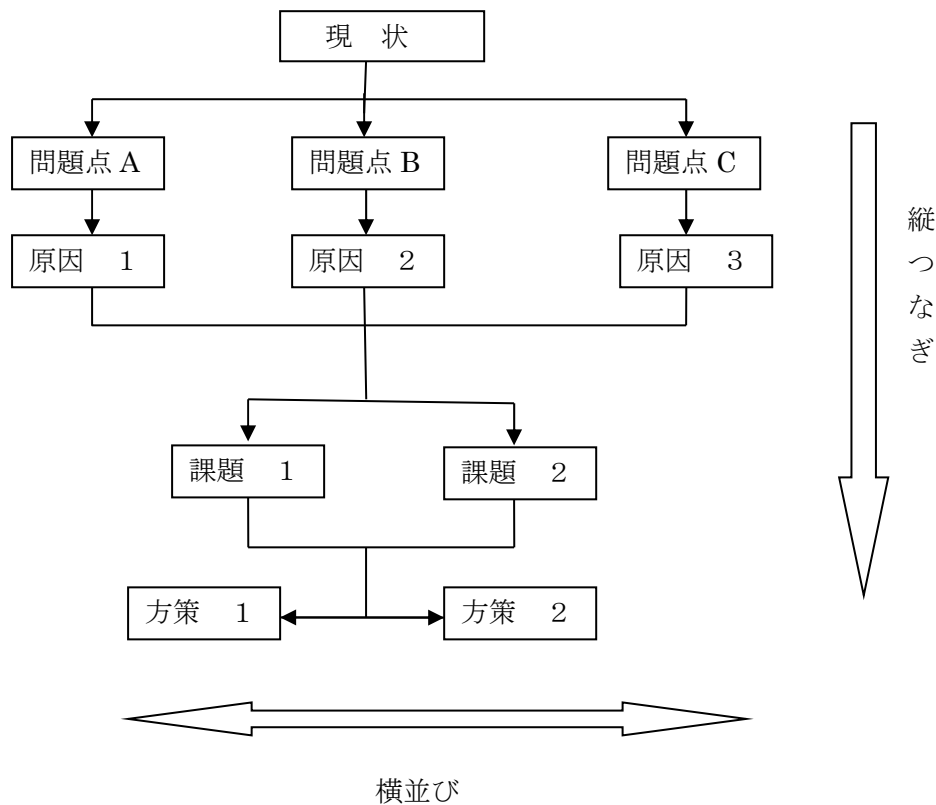


図-2 パラグラフの縦、横方向の展開

### 3-7 パラグラフの内容と表現を揃える

図-2の横並びに述べるパラグラフは、並べているパラグラフどうしで、内容も表現も揃えると文章は分かりやすく論理的になります。書き始める前に予め文章のロジックを表にしておいて、その表を文章に落とし込むのがコツです。

以下の問題文について、過去問の答案例で具体的に例示します。

問題文：鉄筋コンクリートのひび割れの発生メカニズムと影響因子を2例挙げて説明し、ひび割れ防止のための取り組みについて述べよ。

この問題文について、ひび割れの発生メカニズムと影響因子の説明の2例を、横並びに解答する答案の前半部分の組み立て方、並べ方を示します。分かりやすくするために(1)、(2)と項目のタイトル(表題)を設けて項にしていますが、パラグラフにする場合と全く同じです。ロジックのキーワードを漏らさないように、書き始める前に記述モレがないよう、以下のような表にメモ(下書き)してから文章にするのがコツです。

テーマ	発生原因 2例分類	発生メカニズム	影響因子
鉄筋コンクリートのひび割れ発生メカニズム	収縮	若材齢時に表面や内部に拘束力が作用 ⇒ 表面から発生	温度変化・・・水和熱 気象作用・・・気温・風・湿度 材料・配合・施工・・・材料分離
	膨張	反応性骨材の膨張 鉄筋が酸化鉄に化学変化(腐食)する際の膨張 ⇒ 内部から発生	アルカリシリカ反応性骨材 コンクリート中のアルカリイオン 塩化物イオン濃度 外部から水の浸透、塩化物の浸透 温度・湿度の環境、 中性化・・・CO <sub>2</sub> 濃度

**答案例：**

鉄筋コンクリートの収縮によるひび割れ、および劣化(化学反応)に伴う膨張によるひび割れ、の2つの例について発生メカニズムと影響因子を説明し、それぞれのひび割れ防止の課題と取り組みを述べる。(・・・最初のパラグラフは総論から始める)

ひび割れは、種々の原因によって部材の内部あるいは外部に局部的な引っ張り応力が生じ、強度の限界を超えることで発生する。その原因には収縮、温度変化、凍結・融解、荷重・外力、材料分離、劣化(化学反応)があるが、いくつかの要因が複合的に作用する場合もある。(・・・次に続く文章で補足して詳しく説明する)

**(1) コンクリートの収縮によるひび割れの発生メカニズムと影響因子**

収縮ひび割れは、コンクリート打ち込み後、ブリーディングや乾燥、周辺の温度変化によってコンクリートが沈下もしくは体積収縮することによって発生する。コンクリートの凝結時に発生する水和熱の急激に変化によっても、同じく過大な引っ張り応力が作用する。いずれも打ち込み直後や、若材令時にまだコンクリートが十分な強度を発現していない表面や内部に拘束力が働くことにより、表面から発生する。

影響因子は、主に材料、配合、施工方法、温度と湿度の変化が挙げられる。すなわち単位水量やセメント量が多い配合による場合、またマスコンクリートにおける水和熱の急激な上昇と低下、材料の分離(沈下)、気象条件として、乾燥速度が速くなる風、気温、湿度、日照など、急激な温度変化や乾燥などに対し、配合、施工方法や養生方法が適切でない場合に生じやすい。

**(2) コンクリートの劣化に伴う膨張によるひび割れの発生メカニズムと影響因子**

膨張ひび割れは、アルカリ骨材反応による骨材の膨張によって発生するひび割れと、鉄筋の腐食によって酸化鉄に化学変化する際の膨張によって発生するひび割れに分けられ、いずれもコンクリートの内部からひび割れが進行する。

影響因子は、コンクリート用骨材中の化学反応成分と、コンクリート中に存在する特に

アルカリイオンや塩化物イオンが挙げられる。さらに外部から水の浸透、塩化物の浸透や温度・湿度の環境に加え二酸化炭素濃度も影響因子である。

(3) ひび割れ防止への取り組み

以下略

最後に、パラグラフを効果的に展開して、分かりやすい文章の組み立て方を脳科学者 茂木健一郎氏の “記憶の「編集力」を鍛えよう” というタイトルの以下の文章を読んで、もう一度おさらいをしてみましょう。これは新聞の短いコラム（約 600 字）で、論文ではありませんが論文と同じようなパラグラフ構造で書かれています。

—記憶の「編集力」を鍛えよう— 茂木健一郎 (西日本新聞のコラム より引用)

アタマの良し悪しというと、真っ先に思い浮かべるものの一つが記憶力である。

記憶力を良くしたい。そんな願いは、学校の試験に苦しめられている学生はもちろん、学校を卒業して長い年月が経った大人にとっても切実なものだろう。特にそろそろ物覚えが悪くなってきたと感じる年代の人にとって、記憶力をどうやったら維持できるかは大いなる関心事に違いない。

・・・ 序論

ところで、脳の記憶のシステムの本当の素晴らしさは、世間で言う「記憶力」とは少し違う点にあるということをご存じだろうか？ 覚えたことを単純に再現するだけなら、機械にでもできる。実際、単純な再現力で比較すれば、人間の脳はコンピュータにはとても敵わない。

人間の脳だけが持つ素晴らしい能力は、自らの記憶を編集して、新しい意味を見出す点にこそある。例えば、何回か会って話をすると、次第にその人柄が判ってくる。あるいは仕事の体験を重ねることで、そのコツをつかんでいく。このような学習のプロセスに、記憶の「編集力」が関わってくるのである。大脳皮質の側頭葉に記憶が蓄えられると、さっそく編集のプロセスが始まる。コンピュータのように何時までも同じ形で記憶が保存されるのではない。過去の他の記憶と関連付けたり、類似点や相違点を比較するなどの無意識のプロセスが進行すると考えられている。

・・・ 本論

人間らしい知性は、単純な記憶の再現ではなく、記憶の巧みな編集によって支えられている。記憶の編集力を鍛えることが、人生を豊かにする。人生の大切な記憶の、良き編集者になりたいものである。

・・・ 結論

それぞれゴシック、斜体で表示している、各パラグラフの冒頭の文が、そのパラグラフの主題文（トピックセンテンス）です。（トピックセンテンスは、通常は改行せずに記述します）このようにそれぞれの冒頭には、主題文（トピックセンテンス）という、その段落の中心となる内容を1つの文で簡潔に要約して記述することが基本です。それによってパラグラフは「ひとつの（ワン）トピック（話題）」を示す単位であることを示しています。パラグラフは単に「読みやすい長さで切る」文章の区切りではなく、いくつかの文のまとまりとして意味を持たせることが基本です。このことで、ずっと分かりやすくなります。

各パラグラフのトピック（話題）には、それぞれ論理的なつながりがなくと唐突な印象となり、文意がわかりにくくなります。各パラグラフの主題文（トピックセンテンス）には、その前のキーワードを用いるか、一貫して同じ用語を含んだ説明文にすると論理的につながりができます。（このコラムの場合は「記憶」あるいは「記憶力」）

主題文に続けて同じ段落内に置く文は、主題文を説明、補足する文で組み立てます。それぞれ段落にしている部分が序論、本論、結論として構成されている段落（パラグラフ）

であることがお分かりでしょう。さらに斜体強調文字にしている部分がそれぞれの段落の主題文（トピックセンテンス）です。

主題文で段落の主題を表現し、その後続く文章はそれぞれの主題文を説明・補足するための文章にしています。つまりこれまで説明したとおりの構成でまとめているのです。

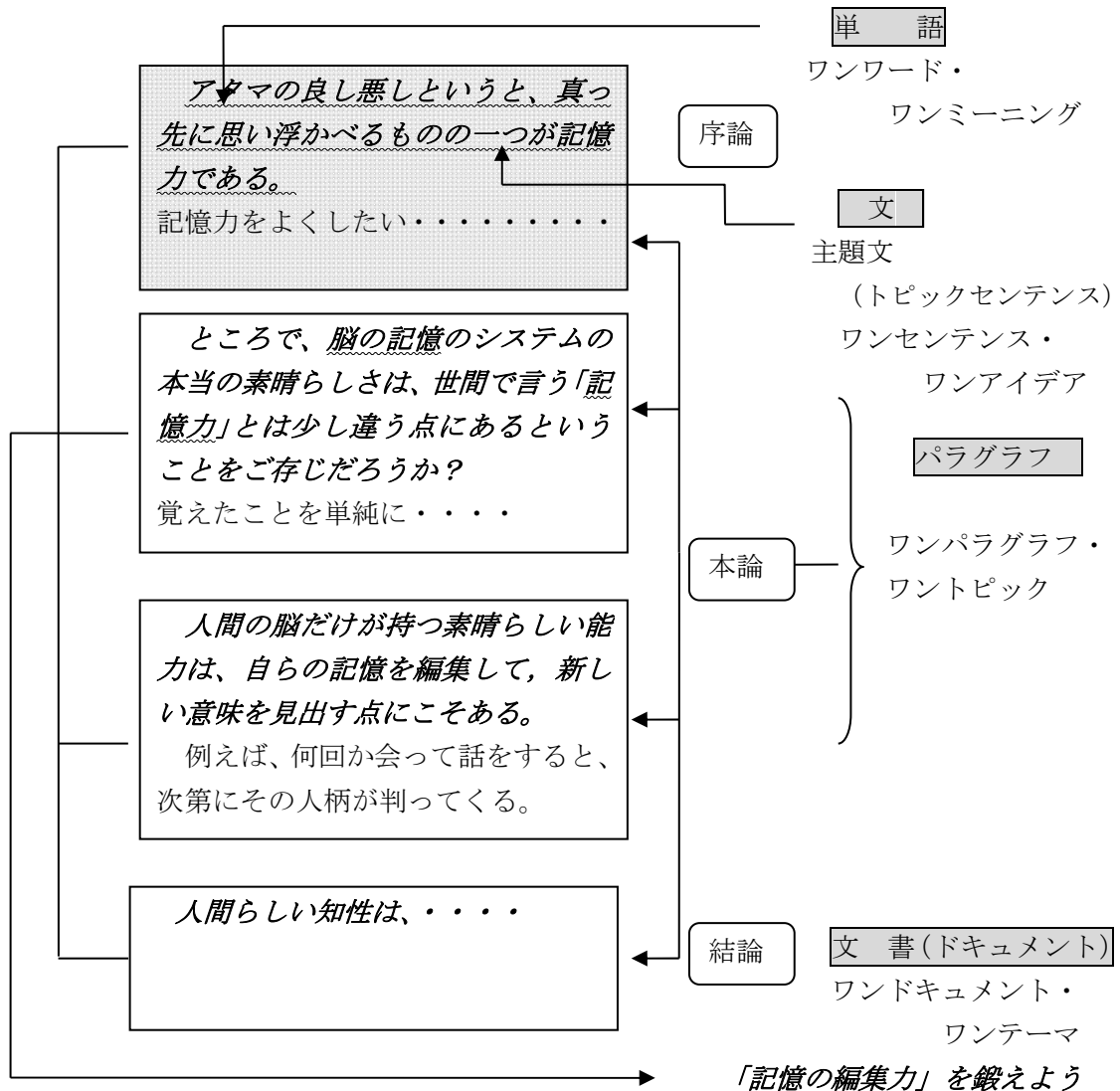
分かりやすい実用的な文章は、長短に関わらずこのように大きい構造（骨格）と小さい構造（流れ）の組み合わせで作られています。そのことは主題文（トピックセンテンス）だけを並べると、このコラムの概要（サマリーあるいはアブストラクトという）になり、コラム全体の主題を理解できることで確認されます。

このようにパラグラフ構造で文章を展開する訓練をしておくと、主旨を変えずに文字数を短く（簡潔）も、長く（詳細）にも調節が容易にできます。

アタマの良し悪しというと、真っ先に思い浮かべるものの一つが記憶力である。ところで、脳の記憶のシステムの本当の素晴らしさは、世間で言う「記憶力」とは少し違う点にあるということをご存じだろうか？

人間の脳だけが持つ素晴らしい能力は、自らの記憶を編集して、新しい意味を見出す点にある。人間らしい知性は、単純な記憶の再現ではなく記憶の巧みな編集によって支えられている。

以下に、このコラムの構造を図で示してみました。



図—3 わかりやすい文書のまとめ方の基本セオリーのイメージ